

ディズニー映画のミュージカルナンバーにみるプリンセス像の変遷

高橋唯

ディズニー映画に登場するプリンセスたちは、従来ジェンダーステレオタイプを助長させていると指摘されてきた一方で、時代とともに変化をしているともいわれてきた。本研究は、ディズニー映画のミュージカルナンバーに着目し、歌詞の量的な調査や内容分析を行うことにより、プリンセス像のステレオタイプからの解放、およびジェンダー表現の変遷がどのように生じているのかを明らかにし、ディズニー映画に登場するプリンセス像が時代とともにどのように変遷しているのかを明らかにすることを目的とした。調査対象作品は、ディズニー映画において、プリンセスが主人公である 13 作品とし、対象とするプリンセスは 14 人とした。上瀬、佐々木(2016)の分類を参考にし、作品が制作された時期を初期、中期、最新期に 3 分し、それぞれの時期ごとに、登場人物が歌うミュージカルナンバー中の総単語数、頻出単語の調査と分析を行った。また、ミュージカルナンバーと一緒に歌う相手、ミュージカル映画において重要な役割を果たす“*I want song*”の歌詞内容、プリンセスの登場するショットについても調査と分析を行った。

その結果、量的調査、内容分析の双方においてプリンセスのジェンダーステレオタイプからの解放、ジェンダー表現の変遷が生じていることが明らかになった。

まず、歌詞内容の量的な調査から初期と中期・最新期で、それぞれ歌詞の傾向が異なっていることが明らかになった。初期はいずれの作品においても類似した単語が使われていたが、中期以降は個性的な単語になり、総単語数は年々増加する傾向にあることが示された。

次に、内容分析では、時期によりプリンセス像が変化していることが明らかになった。初期の作品では、「信じていれば、夢は叶う」ことが歌われ、プリンセスは受動的で家庭的な女性としてステレオタイプの的に描かれていた。ジェンダーに対する問題意識の高まった中期以降の作品では、閉鎖された世界から、自立を求めるプリンセス像が出現するようになり、2000 年代に入ると社会の中で、望みの実現に向けた具体的な行動をする、より主体的なプリンセス像が出現する。ミュージカル映画において、重要な役割を果たす“*I want song*”も時代とともにその役割を変化させ、夢や望みを歌うのみでなく、行動するための動機付けとしての役割を果たすようになった。

本研究の結果、プリンセスの歌うミュージカルナンバーを持つディズニー映画が、社会の変化に呼応し、ジェンダー表現を変容させ時代を反映したプリンセス像を描出していることが明らかになった。

本研究の結果は、ディズニーミュージカル映画以外の映像コンテンツにおけるジェンダー表現研究に資するのみならず、メディアにおけるジェンダー論にも有益な知見を提供するものと考えられる。

(指導教員 辻泰明)